



休日の午後のコンサート

2024.6.9(日) 14:00開演 東京オペラシティ コンサートホール

Sun. June 9, 2024, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

〈コバケンの『わが祖国』〉 (Kobaken's Má Vlast)

指揮とお話 小林研一郎 Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

ピアノ 小林愛実* Aimi Kobayashi, piano

司会 朝岡 聡 Satoshi Asaoka, MC

コンサートマスター 依田真宣 Masanobu Yoda, concertmaster

モーツァルト：ピアノ協奏曲第20番* (約30分)

Mozart: Piano concerto No. 20 (ca. 30 min)

第1楽章 アレグロ / 第2楽章 ロマンツェ / 第3楽章 ロンド：アレグロ・アッサイ

I. Allegro / II. Romanze / III. Rondo: Allegro assai

— 休憩 intermission —

スメタナ：連作交響詩『わが祖国』より (約50分) 〈スメタナ生誕200年〉

Smetana: Excerpts from *Má Vlast* (ca. 50 min)

第1曲 ヴィシェフラド(高い城) Vyšehrad (The High Castle)

第2曲 ヴルタヴァ(モルダウ) Vltava (The Moldau)

第3曲 シャールカ Šárka

第4曲 ボヘミアの森と草原から Z českých luhů a hájů (From Bohemia's Woods and Fields)

主催：公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団 / Presented by Tokyo Philharmonic Orchestra

助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動)) | 独立行政法人日本芸術文化振興会

Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council

◎すべてのお客様に、快適にお楽しみいただくために

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。♪演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned. ♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed. ♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance. ♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

出演者プロフィール

指揮とお話 小林研一郎

Ken-ichiro Kobayashi, conductor & speaker

“炎のコバケン”の愛称で親しまれる日本を代表する指揮者。東京藝術大学作曲科、及び指揮科の両科を卒業。1974年第1回ブタペスト国際指揮者コンクール第一位、及び特別賞を受賞。2002年ブラハの春音楽祭では東洋人初のオープニング「わが祖国」を指揮して万雷の拍手を浴びた。これまでにハンガリー国立フィル、チェコ・フィル、アーネム・フィル、ロイヤル・コンセルトヘボウ管、フランス国立放送フィル、ローマ・サンタ・チェチーリア国立管、ロンドン・フィル、ハンガリー放送響、N響、読響、日本フィル、都響等の名立たるオーケストラと共演を重ね、数多くのポジションを歴任。ハンガリー政府よりハンガリー国大十字功労勲章（同国で最高位）等、国内では旭日中綬章、文化庁長官表彰、恩賜賞・日本芸術院賞等を受賞。2005年、社会貢献を目的としたオーケストラ「コバケンとその仲間たちオーケストラ」を設立、以来全国にて活動が続けている。CD、DVDはオクタヴィア・レコードより多数リリース。著書に『指揮者のひとりごと』（日本図書協会選定図書）等がある。現在、日本フィル桂冠名誉指揮者、ハンガリー国立フィル・名古屋フィル・群響桂冠指揮者、読売日響特別客演指揮者、九響名誉客演指揮者、東京藝術大学・東京音楽大学・リスト音楽院名誉教授、ロームミュージックファンデーション評議員等を務める。



©山本倫子

ピアノ 小林愛実

Aimi Kobayashi, piano

2021年10月「第18回ショパン国際ピアノコンクール」第4位入賞。1995年山口県宇部市出身。3歳からピアノを始め、7歳でオーケストラと共演、9歳で国際デビューを果たした。これまでに、スピヴァコフ指揮モスクワ・ヴィルトゥオーゾ、ブリュッヘン指揮18世紀オーケストラ、ジャッド指揮ブラジル響、ポスカ指揮チューリヒ・トーンハレ管など国内外における多数のオーケストラと共演。2010年14歳でEMI ClassicsよりCDデビュー。サントリーホールで日本人最年少となる発売記念リサイタルを開催した。翌2011年にはセカンドアルバム「熱情」をリリース。2015年10月「第17回ショパン国際ピアノコンクール」ファイナリストとなった。2018年4月、ワーナー・クラシックスよりCD「ニュー・ステージ〜リスト&ショパンを弾く」をリリース。同年8月には、ラ・ロック・ダンテロン国際ピアノ音楽祭に出演し好評を得た。2021年8月ワーナー・クラシックスより最新CD「ショパン：前奏曲集 他」をリリース。フィラデルフィア・カーティス音楽院で、マンチェ・リュウ教授のもと研鑽を積んだ。2022年3月、第31回出光音楽賞受賞。



©HOSOO CO., LTD

司会 朝岡 聡

Satoshi Asaoka, MC

慶應義塾大学卒業後、テレビ朝日のアナウンサーとして活躍。フリーとなってからは、テレビ・ラジオ・CMのほか、クラシックコンサートの企画構成や司会でもコンサート・ソムリエとして活動のフィールドを広げている。興味深い内容を軽妙な語り口で展開する独自の世界は、新しい芸術ファンのすそ野を広げる司会者として注目と信頼を集めている。

日本ロッシーニ協会副会長。東京藝術大学客員教授。



プログラム・ノート

解説＝柴田克彦

コバケン十八番の『わが祖国』とモーツァルトの深遠な協奏曲を

今回の「休日の午後のコンサート」のテーマは、〈コバケンの『わが祖国』〉。お馴染み“炎のマエストロ”小林研一郎が、十八番の名作を主軸に情熱的な音楽を奏でます。

『わが祖国』（今回は全6曲中4曲を演奏）は、哀愁を帯びた旋律や迫真的な描写など、チェコの国民だけでなく、日本人の琴線をも刺激する魅力を満載した名曲。コバケンは、東洋人としては初めて「プラハの春」音楽祭の開幕公演で指揮したほか、チェコ・フィルや、東京フィルを含めた日本の様々な楽団で取り上げ、再三名演を展開しています。それだけに、いっそう円熟味を増した今の彼が聴かせる音楽に多大な期待が集まります。

前半のモーツァルトのピアノ協奏曲第20番では、2021年のショパン・コンクール入賞で名を高めた俊才ピアニスト・小林愛実が美しき彩りを加えます。この深遠な協奏曲を、ベテラン・マエストロのサポートを得た彼女がどう奏でるか？ こちらも大いに注目されます。

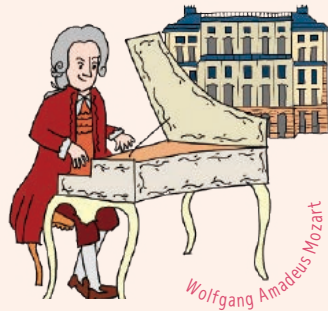


マエストロ小林の円熟味を増した演奏とともに、俊英・小林愛実によるモーツァルトもご堪能ください

ピアノ協奏曲の歴史を変えた記念碑的作品

最初は、ウィーン古典派の天才**ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト**(1756-1791)の**ピアノ協奏曲第20番**。二短調のシリアスな曲調でピアノ協奏曲の歴史を変えた記念碑的な作品です。

生地ザルツブルクを拠点にしていたモーツァルトは、1781年に楽都ウィーンへ移りました。そして、ピアノと作曲という自らの才能を同時に発揮できるピアノ協奏曲を意欲的に作曲し、予約演奏会で初演しました。同演奏会は貴族等から予約を募って開く自主公演で、モーツァルトに莫大な収入と人気の上昇をもたらしました。それゆえ彼は1782～83年に3曲、84年に6曲と立て続けにピアノ協奏曲を作曲しています。



しかし彼のピアノ協奏曲は、1785年に突然、それまでの耳あたりのよい音楽から深遠な世界へ移行します。1785年2月の予約演奏会で初演された第20番は、その幕開けとなった作品。モーツァルト初の短調を基調とした協奏曲である本作は、深刻さと劇的な迫力を有しています。不安げなシンコペーションで始まる第1楽章と上行する動きで激しさを印象付ける第3楽章の厳しさは、当時のピアノ協奏曲の常識を超えており、清澄さが際立つ第2楽章との対比も鮮やか。こうした曲調は次世紀のロマン派の先駆けをなしています。

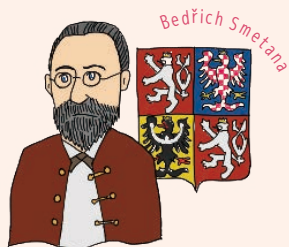
なお本作はベートーヴェンが愛奏し、カデンツァ(ソリストが単独で披露する技巧的な一節。主に楽章の終盤に置かれます)も残っています。モーツァルト作のカデンツァは現存していないので、それが多く用いられますが、ブラームス作や奏者の自作が弾かれる場合もあります。

形は通常の協奏曲と同じ急―緩―急の3楽章構成。特に深刻で劇的な**第1楽章(アレグロ)**、天国的なまでに美しい主部に激しい中間部が挟まれる**第2楽章(ロマンツェ)**、不安感を湛えながら進み、明るめの音楽で終結する**第3楽章(アレグロ・アッサイ)**が続きます。

チェコの歴史や自然を題材にした国民的音楽

後半は、“チェコ国民主義音楽の祖”**ベドルジーハ・スメタナ**(1824-1884)の代表作『**わが祖国**』より。全体は全6曲の連作交響詩ですが、今回はその内最初の4曲が披露されます。

チェコのボヘミア地方に生まれたスメタナは、地元で学んだ後の1856～61年、スウェーデンのエーテボリで指揮者、ピアニストとして活動します。そして祖国に戻ると、当時支配するオーストリア帝国からの独立運動の真ただ中。自身も祖国愛が高まり、自国を題材にしたオペラ、中でも1866年初演の『売られた花嫁』で大成功を収めます。ところが難聴を患い、1874年には聴覚を失ってしまいました。



『わが祖国』は、その悲劇の直前にあたる1872年から構想が開始され、1874～79年に順次完成されました。内容はチェコの歴史や自然を題材にした民族的な音楽。本作は、国民の祖国愛を鼓舞し、スメタナの代表曲のみならず、国を象徴する存在ともなりました。そして今も、スメタナの命日の5月12日に開幕する「プラハの春」音楽祭の初日に必ず演奏されるなど、特別な扱いを受けています。

なお、今回演奏される4曲の後に、「ターボル」「ブラニーク」の2曲が続きます。しかし、全曲に共通した主題がありながらも、各曲ごとに独立した音楽となっています。

第1曲 ヴィシェフラド(高い城)

タイトルは、プラハの南のヴルタヴァ河畔にある城の名。「高い城」と訳されることもあります。本来は固有名詞です。「伝説の吟遊詩人のハープが聞こえ、ヴィシェフラドの栄光と闘い、没落の歴史が語られる。そして追憶のハープで結ばれる」(「 」内はスメタナ自身による標題。以下同)。

ゆったりと開始。冒頭のハープ2台の動きの中に、6曲全体の基本動機が示されます。この主題が繰り返された後、テンポを速めて闘いの場面が描かれ、クライマックスを形成。最後は遅い音楽に戻って追憶のハープが響きます。

第2曲 ヴルタヴァ(モルダウ)

ボヘミア地方の中心を流れる川の名。その川の流れや周辺の風物を描いた、単独でも有名な1曲です。一般には「モルダウ」の題で親しまれていますが、それはドイツ語名で、チェコ語ではヴルタヴァ。「2本の水源が合流して流れ出し、川幅を増しながら、森の狩、婚礼の踊り、月の光と妖精の舞い、聖ヨハネの急流、プラハ市内、ヴィシェフラドを経て、遠くへ去っていく」。

2本のフルートで源流が示され、クラリネットが吹くもうひとつの流れと合わさって川になります。次のなめらかで美しい旋律が、川の流れを表わすメインテーマ。続いてホルンが森の狩の角笛を表し、楽しく弾む田舎の婚礼の踊り、夢見るような月の光と妖精の舞い、突然激しくなる急流、テーマが明るく奏されるプラハ市内、堂々としたヴィシェフラドと場面が変わっていきます。

第3曲 シャールカ

古代チェコの伝説的な勇女の名。プラハ北東の地名にもなっています。「恋人に裏切られて、男への復讐を誓うシャールカ。ツィラート率いる兵士たちが近づき、わざと木に縛り付けられている彼女に魅せられたツィラートは、その縛を解いてやる。だが



シャルカは兵士たちを酔わせて眠らせる。やがて角笛を合図に隠れていたアマゾネスが襲いかかり、彼らを皆殺しにする」。

厳しい主題で始まり、兵士たちの行進曲が続きます。クラリネットとチェロがシャルカとツイラートの対話を表し、舞曲風の宴会の場面が静まると、ホルンの合図をきっかけに女戦士軍アマゾネスの襲撃を描いた激しい音楽となります。起伏に富んだ劇的な1曲です。

第4曲 ボヘミアの森と草原から

タイトル通り、祖国の美しい風土の描写。「ボヘミアの風景を眺めたときの感情が描かれている。森や草原から喜びや悲しみの歌が聞こえてくる。ホルンが描く森、エルベ河畔の谷あいなど、ボヘミアの森と草原は、心に感慨を抱かせる。聴き手は自由に風景を描くことができる」。

伸びやかな主題に、クラリネット、オーボエ、ヴァイオリン、ホルンの旋律が続きます。これらの主題が展開され、ポルカも登場。華やかに終わります。民族舞曲をまじえた、全曲の中では牧歌的な音楽です。



しばた・かつひこ（音楽ライター）／音楽マネージメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、Web、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」（朝日新書）、「吹奏楽編曲されているクラシック名曲集」（音楽之友社）。